

特にオリゲネス主義論争の進展と共に、アウグスティヌスは司教として状況に応じて選択的にオリゲネスの聖書解釈の伝統を受け入れていったために、ペラギウス主義論争では独自の解釈を展開した箇所も多い<sup>12)</sup>。それは金子晴勇の指摘するように、「司教として広く民衆に触れ、その慢性的な病弱状態を知悉し、情欲に負けた自己の内なる罪の深淵にたえず目を向け、根源的罪性を洞察した」結果であろう<sup>13)</sup>。

しかしここから現代人が「罪の遺伝」の思想や教会の幼児洗礼の習慣の問題をどのように理解すべきかについては、ジェンダー論の視点から再検討の必要があると思われる。いずれにしてもパウロの「アダム—キリスト論」の伝統的解釈は、アウグスティヌスによって人類の原罪による恩恵の喪失とその回復の手立てとして新たに解釈されることになったのである。

---

## アウグスティヌスにおける 楽園神話解釈に基づく人間観の形成 ——「嘘」の概念に注目して——

佐藤 真基子

本提題者は2010年の中世哲学会において、アウグスティヌスが『告白』第10巻において自らの欲の把握し難さ、制御し難さを、「嘘」の概念と関係づけていることを論じた。

今回の発表においてはこの「嘘」の概念にふたたび注目することによって<sup>1)</sup>、欲についての彼の議論の背景に、「創世記」の楽園神話解釈があり、

---

11) C. バンメル, op. cit., pp. 351-352 参照。オリゲネスは『ローマ書注解』第5巻第1章14節において、「だが、私たちは使徒 [パウロ] がこれらの問題について個別に言及していないのを知っているゆえに、これらについて長々と論ずるのは安全ではない (de his non est tutum plura disserere)」と述べて、パウロの言葉を超えて論じることを戒めている。

12) オリゲネス主義論争について、D. キーチ前掲書、および Elizabeth A. Clark, *The Origenist Controversy: The Cultural Construction of an Early Christian Debate*, Princeton, 1992 を参照。

13) 金子晴勇, 前掲訳書, p. 241.

その解釈が、アウグスティヌス独自の人間観とその原罪論に展開していることを論じる<sup>2)</sup>。

### 1. 『告白』第10巻における「嘘」の概念

はじめに、『告白』(397/401年)第10巻における「嘘」の概念について確認しよう。先に拙稿(本稿注1参照)で注目したように、アウグスティヌスは『告白』第10巻41章66節において、自らが真理なる神を失った原因を説明し、それを失ったのは自らが「嘘を所有したいと欲した(volvi possidere mendacium)」からだと言っている。ここでアウグスティヌスが言及する「嘘(mendacium)」は「虚偽(falsum)」とは区別されていると考えられる。じっさい、本巻30章以降で展開している、彼自身の現在の諸々の欲のあり方を吟味する議論において、彼は繰り返し、「欺き」の概念に言及している。

身体に必要な配慮が援護を求めているのか、それとも欲の欺瞞的な(fallacia) 快楽が奉仕を請うているのか、しばしば不確かだ。(『告白』第10巻31章44節)

私は香りの誘惑についてはあまり困っていない。ないときは求めないし、あるときは退けない。常にそれがなくても大丈夫だ。私にはそう思われる。もしかすると欺かれている(fallar)のかも知れないが。(『告白』第10巻32章48節)

しかし私の肉のよろこびは、そのよろこびに精神の力を奪われてしまっただけなのだが、しばしば私を欺く(fallit)。(『告白』第10巻33章49節)

1) このときの発表に基づく論文は、佐藤真基子「アウグスティヌス『告白』第10巻における自己欺瞞の理解」、『中世思想研究』第53号、2011年、pp.59-75。

2) 本発表は、同年に行った、以下の二つの学会における成果発表の部分の要約である。いずれの成果も、JSPS 科研費 15K02073 の助成を受けたものである。“Deception and Self-knowledge in Augustine’s Interpretation of the Paradise Myth”, 10ème Édition du Congrès Celtique en Études Classiques (Celtic Conference in Classics), Montréal, 22 Juillet. “Lying as a human nature: Augustine’s concept of lie in the Pelagian controversy,” Asia-Pacific Early Christian Studies Society, 11th Annual Conference: Early Christian Responses to Conflict, Australian Catholic University, Melbourne, 24th October.

このことに関して、私はあなたを知っているほどにも自分を知らない。(……)「私は自らを欺いていて (seducam), 心においても舌においてもあなたの御前で真実を為していない」ということになるのだろうか。(『告白』第10巻37章62節)

これらの言明において、「欺く」主体は、「欲の快樂 (voluptaria cupiditatis)」, 「わたしの肉のよろこび (delectatio carnis meae)」, あるいは「私」すなわちアウグスティヌス自身である<sup>3)</sup>。分裂した自らの欲のあり方を語る『告白』第8巻の議論において、既にアウグスティヌスは、神を求める意志に背く意志も、「私」と別の本性に由来するものではないと論じているから<sup>4)</sup>、この第10巻の議論においても、「欲の快樂」, 「肉のよろこび」は、いずれも「私」自身に由来するものであって、アウグスティヌスは自らの内に自らを欺くあり方があるとみなしていると解釈できる。この自らの「欺き」が、40章66節では「嘘」と表現されており、その「欺き」の結果は、欲のあり方を明らかにしようとしても完全には明らかにし得ないという、自らの無知と、それによって神を完全な仕方で所有することができないという、自らの弱さである。「その方(主)の目において、私は私にとって謎となった。私こそが私の弱さだ (in cuius oculis mihi quaestio factus sum, et ipse est languor meus)」というアウグスティヌスの有名な言葉も、彼の欲のあり方を吟味するこの第10巻の議論の中で語られた言葉である(33章50節)。

「無知」と「弱さ」は、後にペラギウス派との論争を展開する時期にアウグスティヌスが執筆した著作では、アダムとイブの犯した罪に由来してすべての人間がもつあり方としてたびたび語られる。

だが今人間は、恐るべき無知 (ignorantia) と、肉体でなく精神の弱さ (infirmitas) のゆえに、それ(神の命令に従うこと)を全くできないようなあり方で誕生する。(『罪の報いと赦し、幼児洗礼について』(411年)第1巻37章68節)

3) 62節の言説で fallor でなく seduco の語が使われているのは、それが聖書からの引用であるからで、意味の区別はないと解釈できる。

4) 『告白』第8巻10章22節参照。

私たちは二つの理由から罪を犯す。すべきことが分からないことよってか、あるいはすべきことは既に分かっているのにしないことよって。これら二つの内前者は無知 (ignorantia) の悪であり、後者は弱さ (infirmitas) の悪だ。(『エンキリディオ』(421/422年) 22章 81節)

『告白』第10巻の議論では、「無知」と「弱さ」は必ずしも明示的に術語として語られているのではないし、直接アダムとイブの物語と関連づけて語られているのでもない。しかし、上で言及した、分裂した自らの欲のあり方を語る『告白』第8巻の議論でアウグスティヌスは、この欲の分裂が、アダムの罪に由来するものであるという考えを述べている。

私は、既に長い間目論んでいたように、我が主なる神に今や仕えようかと思案していたとき、望んでいたのは私だったが望んでいないのも私だった。その私こそが私だった。私は完全に望んでいたのではなく、また完全に望んでいないのでもなかった。それで私は私と争い、私自身から分裂させられた。この分裂そのものは、たしかに私の意に反して生じたものだった。だがそれは異なる精神の本性を示していたのではなく、私の罰を示していた。だからもはや私とその分裂を引き起こしていたのではなく、私の中に住まう、より自由な人の罪に対する罰に由来する罪が引き起こしていたのだった。私はアダムの子なのだから。(『告白』第8巻10章22節)

以上のことから、『告白』第10巻においても、アウグスティヌスは「創世記」の物語を念頭におっていると推測できる。そしてこの推測に立つとき、上で引用した第10巻31章44節の言明に続いて、次のようにアウグスティヌスが語っていることは注目に値する。

不幸な魂はこの不確かさに気をよくして、その不確かさに弁解の口実を用意し、健康維持を笠に着て快樂の為すことを隠すために、健康を管理するのにどれだけのもので十分かがはっきりしないのをよるこんでいる。(『告白』第10巻31章44節)

この言明から分かるのは、「欲の欺瞞的な快樂」という、欺く「私」と、

その欺きによって、もつべきでない欲を満たしてしまう「私」に加えて、この欺瞞をよろこんで受け入れようとする「不幸な魂」としての「私」という三つの構造で、アウグスティヌスが考えているということである。この三つの構造は、欺く主体であるヘビ、その欺きをよろこんで受け入れるイブ、結果、罪を犯すアダムという、「創世記」の物語と一致しているように見える。かくして『告白』第10巻41章66節でアウグスティヌスが語る「嘘」の概念の背景にも、この楽園神話解釈があると推測できよう。では、「創世記」解釈において、アウグスティヌスが「嘘」の概念をどのように論じているかを、次に見ることにしよう。

## 2. 楽園神話解釈における「嘘」の概念

「創世記」第2章から第3章で語られる楽園神話において、「嘘」の概念は言及されていない。しかしアウグスティヌスは、『マニ教徒に対する「創世記」注解』（388/389年）において、「嘘」の概念を関係づけてその解釈を展開している。

じつにイチジクの葉は、もしこのことが非物体的な事柄においてもうまく言われるなら、何らかの痒みを指し示している。精神はその痒みを、嘘をつくよろこびや欲求によって驚くべき仕方で被る。（『マニ教徒に対する「創世記」注解』第2巻15章23節）

この言明においてアウグスティヌスが「嘘」の概念を関係づけているのは、イチジクの葉によってアダムとイブが互いに互いの部分を隠す行為である。隠しているのは、自らの本当の欲のあり方であり、その行為によって、互いが互いを完全な仕方で見るができないという事態が生じている。

アウグスティヌスはまた、次のようにも論じている。

彼らはその方（神）の「声を聞いて」、その方の視野から「隠れた」。神を捨て、自らのものを愛し始めた者より他に、誰が神の視野から隠れるだろうか。というのも、彼らは嘘という覆いをもっていたからだ。すなわち「嘘を語る者は、自らのものから語る」（ヨハ8:44）。（『マニ教徒に対する「創世記」注解』第2巻16章24節）

だが真理そのものは、それ（人間の魂）より上にある不可変なる神だ。

それゆえ、誰であれその真理から背いて自らの方に向き、導き手であり照らし手である神からではなくまるで自由な動きであるかのように自らの動きからよるこびあがる者は、嘘によって暗くされる。じっさい、「嘘を語る者は、自らのものから語る」のだから。そしてそうした仕方で混乱し、預言者のあの声、すなわち「私の魂は自分自身に向かって混乱した」（詩 41：7）と言われたことを証する。（『マニ教徒に対する「創世記」注解』第2巻16章24節）

ここでもアウグスティヌスは、自らを隠すという人間の行為と、「嘘」の概念を関係づけている。アダムとイブは神から「隠れた」が、神の目には彼らが見えなくなるということはなく、神は欺かれない。二人が「嘘」によって欺いたのは、神ではなく彼ら自身である。そしてその嘘によって、彼らは真理である神を失い「暗くされる」。この注解におけるアウグスティヌスの議論は、『告白』第10巻における、「嘘」によって真理である神を失い自らのあり方を知ることさえできないという議論と一致していることが分かる<sup>5)</sup>。『告白』第10巻の議論は一見したところアウグスティヌス個人の話として語られているが、しかしその背景に、最初の人間に由来してすべての人間がもつ罪のあり方についての理解があることは、確かであると言えよう。

じっさい、『マニ教徒に対する「創世記」注解』以降『告白』を執筆するまでに取り組まれた著作においても、アウグスティヌスは、「嘘」の概念と自らを「隠す」行為を関係づけ、内在する罪によって人間は自らを欺くという人間観を示している。

嘘つきや欺く人たちのことを加えて考えてごらんなさい。彼らをとおして、言葉によって心が明らかにされないばかりでなく隠されているということを、君は容易に理解できるだろう。（『教師論』（389年）13章42節）

だから虚偽が生じるのは、事物そのものが欺くからではなくて、

---

5) 次の言説も、最初の人間がついた「嘘」が、彼らの子孫であるすべての人間がもつあり方に反映しているというアウグスティヌスの考えを示している。「つまり、彼らは真理の顔を放棄して嘘をつく欲望を求め、神は嘘つきな心が隠れている彼らの身体を、肉のこの死すべきあり方に変えた」（『マニ教徒に対する「創世記」注解』第2巻21章32節）。

(……) 魂が真理を捨て、それを無視して真実を求めるとき、罪が魂を欺くからだ。(『真の宗教』(390/391年) 36章 67節)

### 3. 「すべての人間は嘘つきである」という人間観

『告白』以降、とくにペラギウス派との論争を展開する時期になると、アウグスティヌスはその著作において、「嘘」の概念と、最初の人間に由来してすべての人間がもつ罪を、明示的に関係づけて論じるようになる。論争をとおしてアウグスティヌスとその敵対者は、聖書の言葉を挙げて自らの見解の根拠とするが、アウグスティヌスはしばしば、「すべての人間は嘘つきである」(詩 115/6:2; ロマ 3:4) という言葉を挙げて、すべての人間は最初の人間に由来する罪をもつから自力で救いに至ることはできないという見解の根拠としている。アウグスティヌスによれば、彼のこの見解に対してカエサリウスは、次のように指摘する。

じっさい彼(カエサリウス)は言う。「民数記に『正直な人間』と書かれていること、そして聖ヨブについて『ウツの地に住むヨブという名の人があった。彼は正直で、責めるべきところがなく、正しく、神を崇め、あらゆる悪しき事柄から離れていた』(ヨブ 1:1) と言われていることに彼らは答えるべきだ」と。(『人間の義の完成』(415年) 12章 29節)

カエサリウスの指摘は、正直な人間の存在も聖書では語られていることをどう説明するのか、というものだ。この指摘に対してアウグスティヌスは、聖書が語る「正直な人間」の例は、すべての人間がもつ罪に同意しない人のことであって、罪をもたない人のことではないと反論する<sup>6)</sup>。そして、さらに「彼は正直な人間の奇跡を成した」(ヨブ 17:8)、「嘘つきな人々は知恵を覚えていないだろう。だが正直な人々は知恵において見出されるだろう」(シラ 15:8)、「彼らの口に嘘は見出されず、彼らには汚点がない」(黙 14:5) といった聖書の言葉を挙げて反論するカエサリウスに対して、アウグスティヌスは次のように答える。

これらのことに対して私たちもまた返答するが、その際心に向けるの

6) 『人間の義の完成』12章 29節参照。

は、人間は神の恩恵と真理によって正直なのであって、自分自身によっては疑いなく嘘つきなのだということがいかにして語られるべきか、である。このことから、「すべての人間は嘘つきだ」と言われた。彼自身提示した「だが正直な人びとは知恵において見出されるだろう」（シラ 15：8）という知恵についての証言もこのことを語っている。知恵においてではなく、自分自身において嘘つきであることが見出されるだろう。（『人間の義の完成』12章30節）

このアウグスティヌスの返答において、「神の恩恵と真理によって (per dei gratiam atque veritatem)」と「自分自身によって (per se ipsum)」, 「知恵において (in illa (sapientia))」と「自分自身において (in se)」が対比されており、いずれも「自分自身」に由来するものとして「嘘つき」というあり方が語られていることに注目してほしい。同様の対比はパウロ書簡の言説に見出されるものであり、アウグスティヌスは394年頃から取り組んだ一連のパウロ書簡解釈において既に、この対比に「嘘」の概念を関係づけて論じている。

「兄弟のみなさん、あなたがたに私が告げた福音は、人間に従った (secundum hominem) ものではない。じじつ私は人間からこの福音を受け取ったのでもなければ教えられたのでもなく、イエス＝キリストの啓示によってなのだ」（ガラ 1：11-12）。人間による福音は、嘘 (mendacium) である。「すべての人間は嘘つき」なのだから。じっさい何であれ人間の内に何か真理に属するものが見出されるなら、それは人間からではなく、神から人間をとおしてあるのだから。（『ガラテヤの信徒への手紙』注解』（394/5年）6節）

「によって (per)」, 「において (in)」, 「に従って (secundum)」, 「から (a, de)」など様々な前置詞を用いながら、人間と神を対比させ、人間に由来するものとして「嘘」を位置づけるアウグスティヌスの議論は、たしかに彼の初期著作に既にその萌芽があると言えるだろう。しかしその議論が、すべての人間のあり方を語る人間観として深化し明示的に提示されるようになるのは、ペラギウス論争期に至ってからである。じっさい、上で引用したガラテヤ書注解とほぼ同じ頃に、アウグスティヌスは「嘘」の概念を主題として『嘘論』を執筆しているが、『嘘論』では、「すべての人間は嘘



つきである」という聖書の言葉は言及されていない。『嘘論』における議論をとおしてアウグスティヌスが主張するのは、「あらゆる嘘は罪である」（だから嘘をついてはならない）というものだ。しかし同じく「嘘」を主題として420年に執筆された『嘘駁論』でアウグスティヌスは次のように述べて、すべての人間は、最初の人間に由来して「嘘」というあり方をもつという人間観を、罪の概念と関係づけて明示している。

じっさい、嘘という名称は罪という名称の代わりに言われることもある。このことから、「すべての人間は嘘つきだ」ということも言われる。じっさい、「すべての人間は罪人だ」と言うのと同じ意味で言われたことなのだ。（『嘘駁論』20章40節）

『嘘駁論』とほぼ同時に執筆された『神の国』第14巻（418/420年）においても、同様の人間観が明示されている。

じっさい人が自分自身に従って生きる、つまり神に従わずに人間に従って生きるなら、じつに嘘に従って生きる。人間そのものが嘘だからではない。人間の創始者であり創造者であるのは神なのだから。神はたしかに嘘の創始者、創造者ではない。そうではなく、人間は自分に従ってではなく、自分を創ってくださった方（神）に従って生きるように創られたから、つまり自分の意志ではなくその方の意志を為すように創られたからだ。そう生きるように創られた仕方で生きないこと、これが「嘘」ということだ。たしかに人は幸せであり得るように生きていない場合でさえ、幸せであることを欲する。こうした意志より欺瞞的なものがあるだろうか。だから「すべての罪は『嘘』だ」と言われるのは言い得ている。じっさい、私たちにとって善くあるよう欲する意志、または悪くあるよう欲しない意志によらずに罪は生じない。とすれば、嘘とは、私たちにとって善くあるよう為されるが結果むしろ私たちにとって悪くなること、または私たちにとってより善くあるよう為されるが結果むしろ私たちにとってより悪くなることだ。その理由は、人間にとって善くあるのは、人間自身からでなく神から以外にあり得ないからに他ならないだろう。その神を、人は罪を犯すとき捨て去り、自らに従って生きることで罪を犯す。（『神の国』第14巻4章1節）

この言説においても、「に従って (secundum)」、「から (de)」といった前置詞とともに、神と人間が対比されており、初期著作に由来する理解がそこにあることが分かる。また、ここでは「意志」の概念が言及されており、自らの意志のあり方に「嘘」を見出す『告白』第10巻の議論と一致する理解が示されてもいる。

このようにアウグスティヌスは、神を愛し求めながらもそれに背く意志も同時に抱いてしまう心のあり方に、すべての人間に共通する「罪」を見出している。それは真実を心に抱きながらも虚偽を語る、「二心」をもつ嘘つきのあり方に他ならない。「嘘」を一つの言語行為としてではなく、原罪としてすべての人間がもつ生のあり方とみなす彼の理解は、その最初期の楽園神話解釈に既にその萌芽がありながら、後期に至るまでに深化し、固有の人間観を形成したと言えるだろう。

この彼の人間観、原罪理解は、しばしばそう言われるように「悲観的」なものだろうか。嘘つきは虚偽のみを愛する者ではなく、真理を失いたがらないという仕方で真理をも愛する者だ。「嘘」を人間の生のあり方として位置づけるアウグスティヌスは、罪人である人間の生にこそ、神との根源的なつながりを見出しているのではないか。それは闇の中にこそ光を見出そうとする、希望をもった人間観であると言うべきだろう。

---

## ペラギウス派による原罪論批判の本質と課題

——悪は「善の欠如」であるか?——

山田 望

### I. 近年の研究動向とペラギウスの非論駁的文書

本シンポジウム提題では、最近の研究動向をも踏まえながら、ペラギウス派によるアウグスティヌスの原罪論に対する批判の本質とは果たして如何なるものであったのかについて、とりわけ、ペラギウスの弟子であったエクランムのユリアヌスとの性欲を巡る論争を手懸かりとして探りつつ、原罪論批判によって浮かび上がってくるさまざまな課題を浮き彫りにする